



WRDプレゼンテーション コンテスト開催される

去る二〇一〇年一二月 希望のあった五クラスより八グループが参加しました。「たべる」をテーマに、第二回WRDプレゼンテーションコンテストが催されました。コンテストは、全学共通教育科目WRDのクラスから参加



審査は、合計四人の審査員によって「テーマ性」「内容」「構成」などの審査項目に沿って審査が行われました。その結果、グループとしての結果は、以下のようにな

第2回 WRD プレゼンテーションコンテスト 結果

- ◆優勝
ラッキーイレブン (経済・法 WRD4・金3: 東谷護: 鈴木・寺川・塩沢・岡田・大野・本波・本田・永島・荒井・鶴巻・山本)
『本当にコンビニは便利であるのか』
 - ◆準優勝
チームはやお (文芸 WRD10・水4: 師玉真理: 平島・齋藤・細野・今西・山口)
『ジブリの食べ物』
 - ◆3位
教授チーム (文芸 WRD10・水4: 師玉真理: 綿谷・川上・八田・服部・深沢)
『新しいコンセプトのレストラン』
 - ◆4位
チームあるちう (経済・法 WRD2・水4: 阿部勘一: 大澤・藤平・原・篠原・刑部・中井・解良・田中・渡部・富安)
『酒とコミュニケーション』
- ※1 () はクラス・開講曜限と担当教員・メンバー
※2 残り4チームには「努力賞」を贈呈
- ★審査員 (五〇音順・敬称略)
飯間 浩明 (早稲田大学非常勤講師、
『三省堂国語辞典』編集委員)
桑田 学 (神奈川工科大学非常勤講師)
周東 美材 (成城大学非常勤講師)
太子堂 正称 (東洋大学経済学部准教授)

りました。また、特に活躍が見られた個人に対して、「ベストプレゼンター」などの個人賞が贈られました。また、表彰に先立って、各審査委員の先生方全員から、一つのグループに対して詳細な講評をしていただき、学生達は、メモをとるなどしながら熱心に聞

き入っていました。今年は昨年に比べて、フロアーの学生からの質問や意見などの発言が多く出ました。これは、「ベスト質問賞」という個人賞が贈られる可能性がある『旨のことも告知していただきます』旨のこともありますが、それとは別に、互いに積極的に発言をしようとしたことは、とても評価できるでしょう。様々な質問や意見が飛び交うプレゼンテーションは、むしろ質の高いプレゼン



テーションだと考えられます。今回のコンテストで議論が活発に行われたことは、質の高いプレゼンテーションが多かった証拠とも言えるでしょう。来年度も、同時期(一二

ご意見・ご感想・寄稿募集

『とりのこえ』では、みなさまからのご意見やご感想、共通教育(教養教育、初年次教育など)にまつわる話題や原稿などを募集しております。詳細は、本センター(2頁参照)までお願いいたします。

部・阿部勘一)。月三週目の土曜日)に、プレゼンテーションコンテストを開催する予定です。また、今回のプレゼンテーションコンテストの内容をまとめた報告書を作成し、三月末に発行する予定です(経済学



FD公開ワークショップ開催される

去る二〇一〇年一二月 ともに、『文章は接続詞

四日(土)、成城大学三号 館三階大会議室において、共通教育研究センターの主催でFDワークショップが開催されました。告知が開催一ヶ月を切つていたにもかかわらず、一橋大学をはじめ他大学の教員や大学院生、出版社の編集者など、外部の方の参加も多くありました。

講師には、一橋大学国際教育センター・大学院言語社会学研究科の石黒圭准教授をお迎えしました。石黒先生は、日本語に関する専門書を著すに



り型のものである」と指摘し、その上で、われわれが学生に対してどのよう「効果的」な文章指導をすべきなのか、ということを考えるべきである」と問題提起しました。

この問題提起を踏まえながら、石黒先生に講演を

していただきました。

石黒先生は、今回のワークショップのため、早稲田大学で担当されている授業で学生にレポートを課し、そのレポートをもとに、学生のレポートにある問題を、「形式面の問題」「内容の問題」に大別して分析されました。その上で、本来は、この二つの問題を両輪のものとして指導するのが好ましいにもかかわらず、結果的にどちらか一方に力点が置かれてしまうことが多いと指摘されました。石黒先生の言葉を借りれば、「言語の専門家が文章指南書を書く場合、形式面の記述に偏り、内容面の問題に触れない傾向」があり、反面、各分野の専門家の場合、「内容面の問題は適切に指導できるが、形式面の指摘をする



場合、言語事実に関わらない、誤りの多いものになる傾向」があると言います。指導のカリキュラムを組む場合、言語の専門家と各分野の専門家が協力してカリキュラムの構築をする必要があると、石黒先生は説きます。

「内容面の問題」に関して、石黒先生の指摘で特に興味深いのは、「答えにオリジナリティがあるか」という問題です。これは、現在よく問題になる「参考文献と引用の問題」と関係します。いわゆる「コピー＆ペースト」貼付」の問題と

も絡みますが、一般の辞書類からの引用はもちろん、引用文献、引用箇所を明示はしているが引用だけに終始するレポート、引用と自身の意見との区別が付かないレポートなどが少なくないという指摘を、石黒先生はされています。その上で、石黒先生は、引用に終始する(引用を中心とする)レポートは、「研究」ではなく「勉強」である」と指摘され、「じつは、『研究』ではなく、『勉強』をさせてしまっているのは教師かもしれない」と述べられています。教師が、「『研究』



と『勉強』を区別して、課題を「提示する習慣を持たないと、学生がその二つを混同してしまう」という指摘は、目から鱗が落ちるものでした。

石黒先生の講演の後、参加者による全体討論が行われましたが、予定時間を超過するほど、白熱した討論となりました。

なお、公開FDワークショップの内容は、本センター発行の紀要『成城大学共通教育論集』第四号(二〇一〇年度末発行予定)に記載予定、当日の資料は本センターのウェブページに掲載予定です。(経済学部・阿部勘一)

『とりのこえ』

成城大学 共通教育研究センター
ニュースレター 2010年度 第3号
(2011年2月22日発行)

発行責任者: 津上 英輔
編集担当: 阿部 勘一

成城大学 共通教育研究センター
〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20
Tel: 03-3482-9556 Fax: 03-3482-9053
e-mail: kyotsu@seijo.ac.jp